

笑顔がつながる就職支援に乾杯

東京都立城南職業能力開発センター 工藤 孝之

内定しちゃった

過日、「内定しちゃった」と、いきなり歓喜あふれたAさんの声が私の背後から飛び込んできた。職員室でおにぎりをほおぼっていた私は、振り向くと同時に思わずハイタッチしたいほどのうれしさが込み上げた。

その2週間程前になるが、OAシステム管理科生徒のAさんが就職相談にきた。1枚の求人票を大事そうに抱えていた。その求人票を見せられた時、はっとした。最近、受理したE社の求人票で見覚えがあった。来所されたE社役員の方と面談した際、中身について助言を求められた。何とも雇用条件が素晴らしかった。初年度から通常の2倍を越す年収を明記していた。当然、要求レベルも高い。年収にふさわしく提案型ビジネスができる人を求めている。

そこで、私は、応募職の魅力を最大限に引き出せるストーリーにしたらどうか、とAさんに提案した。すなわち、システム提案から仕様分析、設計、プログラミング、検証、運用まで一体化した業務に取り組むことができるなんてどんなに素晴らしいことか。特に初期のシステム提案こそが決め手で、これが価値の高い仕事を生み出し、同時に技術者としてのステップアップにどれだけ寄与するか、というストーリーを盛り込もう、と。Aさんの瞳がみるみる輝いたのを覚えている。

Aさんの本気度を確かめた後、私は生半可な就職支援では内定を得ることができないと判断し、用意周到に対策を練った。応募書類の質を上げることはもちろんだが、何よりも面接攻略に知恵を絞った。

Aさんと一緒に具体的な目標を示したプレゼン資料までつくった。5年後には年収の5倍を稼ぐシステムエンジニアになる、そのための行動計画と、根拠となるビジネスモデルを準備した。

役員面接で、そうしたシナリオに沿った話をした途端、社長の顔色が急に変わったので驚いたよ、とAさんの目が潤んだ。私も思わず貫い泣きしそうになった。これだから、就職支援の仕事から離れられないのだ。自身が改めて仕事の喜びを実感した瞬間でもあった。

今の時代の就職支援に求められること

現在、私は都立城南職業能力開発センター（当センター）で、職業訓練生に対して就職支援をしている。大事な役割に、事業主との対話による質の高い求人票の入手がある。次に、いやそれ以上に、就職を求める生徒の思いを、どうしたら求人側に伝えることができるか、その本質に切り込んだ就職支援に精一杯の情熱を注ぐ。

改めて申すまでもないことだが、ここにいる生徒達は皆、自分に合った最高の就職先を求めて入校して来る。就職が人生設計にどれほど大きく影響するかは誰もが知っているはずだ。それを念頭に置き、連日、就職支援に際しては真剣勝負で取り組むようにしている。

就職支援の主な機能は、職業講話と就職相談である。前者は入校した後、比較的早い段階で行っている。私の場合、職業講話では一般的な職業ガイダンスだけでなく、訓練科目に応じて、その職務がどんな魅力を持っているか、求人側が何を求めているか、

できるだけ具体的に解説するようにしている。それにより生徒自身の職業観を高め、就職挑戦の意欲を植え付けさせることができるからだ。

後者の就職相談では、私なりの流儀とも言える「その場完結」を心掛けるようにしている。若者の本離れや作文力の低下が指摘されるようになって久しいが、こうした傾向は何も若者だけではない。社会経験の豊富な方であっても、いざ、応募に臨む志望動機や自己PRを書こうとしても、思うように仕上がらないで悩む方が何と多いことか。それに対して、「この表現をもっと具体的に」、「あなたの魅力を引き出すように表現して」と指摘するのは簡単だ。ただ、それができないから添削を求めてきているのが現実なのだ。それを理解すれば、面談のその場で迅速かつ完全なる添削をするのがプロとしての就職支援ではないか。そうした事情からこの「完全添削」を実践するようになった。

完全添削の背景には具体論を浸透させたい思いもある。志望動機を例にとると、従来の就職支援の教科書では、「これまでの経験を活かして貴社に貢献します」程度で済ませているケースが何と多かったことか。残念ながら、これでは今の時代にはそぐわない、と感じている。

そもそも、応募職がどんなもので、どれだけ厳しいのか、応募職のどこに魅かれたのか、これらをきちんと把握することがとても重要だと考える。その上で、なぜ応募決意をしたのか、自分の思いや動機をきちんと述べ、入社したらどう取り組むつもりか、能力向上を含め、自分の考えをわかりやすく表現しなければ求人側の心を掴むことは到底できない。

当センターの場合、新たな職に就くための技能・技術の習得に1年、6か月もしくは3か月の期間をかける。ほとんどが異業種への応募となる。それを踏まえると、「貴社に貢献する」といった、上目線的な表現をするのはいかにもおこがましい気がする。即戦力には至っていないケースがほとんどなのだから。

近年、景気が持ち直しつつあると言われる。とりわけ2020年の東京オリンピックという一大イベントを控え、建設業界、情報処理・福祉関係などの求人

需要が急激に高まっている。それを裏付けるかのように、厚労省の労働に関する統計でも、求人者数と求職者数の比率である有効求人倍率が飛躍的に向上し、就職しやすくなったと盛んにPRされるようになった。

それはそれで素晴らしいことであるが、たとえ有効求人倍率がどれだけ上がろうとも、就職は応募者自身の中身である資質とスキルを求人側がどう評価するかで決まる。酷な言い方をすれば、一定のレベルに達していなければ決して採用には至らない。

ここに就職支援の存在する意義がある。職業訓練でどれだけスキルを身に付けたとしても、相手に理解されなければ絵に描いた餅になる。そのためにも、応募書類や面接で及第点を取る必要があるわけだ。私はこれを自己プレゼンと呼んでいる。つまり、就職に向けた自己プレゼンをいかに高めるか、これが最も大事な点である。

この自己プレゼンであるが、必要なのは何も求職希望の生徒だけではない。求人側にも当てはまる気がする。求人票を見た生徒が、そこを受けようと思うには心に響く何かが必要だ。私は次の3点がポイントだと感じている。

- (1) 企業の魅力
- (2) 将来の職務面での発展性
- (3) 能力向上に向けた資格等の奨励

まず(1)の会社の魅力だが、会社の特徴欄には、どんな分野に強いのか、他社差別化の技術力は何か、などが必要だ。それらの魅力が明確になっていなければ、この会社に入ろうかな、とは決して思わないだろう。

次に(2)の将来の職務面での発展性であるが、自分の人生設計にも大きく左右するので、大きな関心ごとになる。当面は現場作業員からスタートしても、5年後、10年後には責任者としての仕事が任せられる、そうしたシナリオが読み取れることが大事だ。仕事に責任とやりがいを持てるようになれば待遇面でも向上することはまちがいないからだ。

(3)の資格等の奨励はどこの企業でも当たり前に取り組んでいることだが、記述していない場合も散見される。これでは読む方には伝わらない。やはり

きちんと明記した方がいい。

最近、求人票を持参してきた事業主に、釈迦に説法となるが、上記の意味合いを込めて、今や企業側に求人プレゼンが求められている、と説くケースも増えた。時には思いのほか事業主と会話が弾み、その挙句、求人票の添削まで進むことがある。余計なお世話であることは承知の上だ。なぜ、ここまで踏み込むかと言えば、求人票自体が魅力的でないと単なる紙切れ同然になってしまう。これでは意味がない。後で、出過ぎたことをしたかな、と反省することもある。だが、事業主の困った顔を一度も見ているから、概ね歓迎されているのかな、と割り切るようにしている。

システムエンジニアの魅力

当センターにはO Aシステム開発科という訓練科目がある。このO A (Office Automation) という呼び名には何やら古典めいたものを感じるが、訓練している内容はJavaに代表される最新の情報処理だ。ところで、昨今の情報処理産業の急成長に伴い、当センターに集まる求人票の数もうなぎ昇りである。その中で、求人職種で圧倒的なのが冒頭に紹介したようなシステムエンジニアだ。そこで、システムエンジニアの仕事にからんだ就職支援の話をしてみたい。

システムエンジニアの仕事を一口で言うと、顧客の要求を実現するシステムをつくることである。ここでいうシステムとは、例えば押しボタンで商品の案内表示を行う程度の簡単なものから、私がかつて関わった飛行訓練装置のような複雑かつ大規模なものまでさまざまだ。

したがって、システムエンジニアの仕事も、狭義的にはハードウェアとソフトウェアを組み合わせるとコンピュータシステムを設計すると定義されるが、広義的には、システム提案、要求仕様の分析、システム開発、プロジェクト管理、運用支援まで、人、モノ、技術すべてを含むと定義されることもある。さまざまな解釈が成り立ち、その仕事範囲も極めて深く、だからこそ興味が湧く仕事とも言えるだろう。

システムエンジニアに求められる資質について考えてみる。私は次の3つが当てはまるような気がする。

(1) 論理的思考

システムエンジニアに求められるのは、システム開発計画、要求仕様に基づいた設計、プログラムの最適配置、それらをコンピュータ化する業務処理のための知識と技術能力である。とりわけ命題から処理、結論に至る、すべての過程における論理的思考が大事になる。

(2) 時代に対する敏感さ

先を見据えた戦略を立て、システムを開発しなければならない。そのためには、最新のシステム技術、将来予測、他社の技術動向、顧客の要求、自社経営方針、社員の職業スキルなど、広範囲かつ深い洞察力が求められる。問題を発見し、それをどう解決するか、先を見据えた判断能力も必要となる。これらのベースとなるのが時代に対する敏感さであろう。あくなき探究心と創造力が求められる。

(3) チームで働く意義

大きなシステムになればなるほど個人のスキルを引出し、そのベクトルを結合し、相乗効果を発揮する仕組みづくり、すなわちチーム力が不可欠となる。システムエンジニアは個人能力が大事だが、最終的にはチームで働き、全体として成果を出すことに大きな意義がある。

就職支援の立場から、システムエンジニアの魅力を取り上げれば、やりがいと誇りである。社会に役立つ仕事であると同時に、自身が託せる仕事であり、将来発展性の面からも家族も安心するに違いない。これ以上の魅力を持つ仕事は、他にない。これ以上ない魅力を持つ仕事は、他にない。

次に強調したいのは、創造力で未来を開くことができる、ということだ。創意・工夫を発揮することで魅力ある社会ニーズを追求でき、さらには自己の能力開発にもその創造力をあまねく応用できる。まさしく無限の可能性を秘めていると言っていい。

相手の笑顔が待つ就職支援は料理作りと似て

定年まで、主に飛行訓練装置の技術開発に従事してきた。そんな私がどうして就職支援の仕事をするようになったのか。きっかけは「考え方の論文を発信できなければ一流の技術者とは言えない」というメッセージだったと思う。入社当初に日系アメリカ人の技術マネジャーから叩き込まれたことが影響している。

残念ながら一流技術者にはなれなかったが、考え方の技術論文だけはせっせと書き続けた。おかげで、生徒達の思いが積もった志望動機や自己PRなどの応募書類に対して、私ならこう書くが、とその場での添削が何となくできるようになった。まさにペンを走らせる特技が就職支援の天職を導いてくれたわけ感謝している。

物事には必ず理由がある。今の仕事を選んだ理由は？と問われたら、相手の最高の笑顔が見られるからと答えたい。当センターには若年者から高齢者まで、多様なニーズに沿った訓練科目が存在する。そこで学ぶ生徒達に対し、職業観や人生観を理解し、その上で指導員の先生を支援する形で、応募する職に合った履歴書・職務経歴書の添削、面接指導に注力している。その結果が就職内定にむすびつく。

就職支援は料理作りと似ていると思う。就職支援では、自分に合った就職先選び、応募書類の仕上げ、面接リハーサルが求められる。他方、料理の場合は、

メニューを決め、旬の食材を選び、腕によりをかける調理技術が不可欠だ。どちらにも共通することは、情熱に支えられた創造力と自己研磨である。そして、これが一番のポイントだと思うが、やりがいを持って取り組むことであり、その先に相手の笑顔が待っている。

就職支援が料理作り以上にユニークだと思う点がある。それはレシピのようなわかりやすい教科書が存在しないことだ。したがって、その場の感性が問われるし、先を見据えた分析と判断が必要になる。求人側が求める職務や資質に対し、応募者の人間力、職務への取り組み姿勢、職業スキルがどうか、相手の懐に入って最適解を導かねばならない。未知のファンクションが微妙にからみ、いわば連立方程式を瞬時に解くようなものだ。それだけ大変ではあるが、逆に考えればこれほど脳細胞を刺激する仕事はめったにないのではないか。

仕事選びは人生最大のイベントである。特に若者にとっては、未来を開く人生設計の基盤ともなる。なぜ、その仕事を志望したのか、その仕事にどう取り組むのか、それらの理由を明確にし、本当にやりがいのある仕事に就こうではないか。

就職支援をやっていて一番うれしい瞬間、それは言うまでもなく、生徒が内定の報告に来る時である。そのあふれる笑顔に接すると、それまでの苦労も吹っ飛び、こちらも笑顔になれる。こんな時の晩酌ビールは格別だ。笑顔がつなげる就職支援に乾杯！